

雲仙市文化財調査報告書 第13集

Kuji
小路遺跡

Koujiro Kuji
—神代小路地区街なみ環境整備事業に伴う発掘調査報告—

2014

長崎県雲仙市教育委員会

発行にあたって

このたび平成21年度～平成24年度に実施しました、神代小路街なみ環境整備事業に伴う小路遺跡発掘調査の報告書を発行することになりました。本市は平成17年10月11日(10月11日)に旧7町(国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町)が合併して誕生し、「豊かな大地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」の実現を目指しています。

小路遺跡は、島原半島北端、雲仙市国見町神代小路に所在します。平成17年7月に選定された「重要伝統的建造物群保存地区」の一角に位置し、遺跡のすぐ脇には、保存地区の中心的建物である「国指定重要文化財 旧鍋島家住宅及び長屋門(通称鍋島邸:平成19年6月指定)」とその庭園が広がります。鍋島邸の玄関脇には、昭和初期に植樹された緋寒桜の緋色の花びらがゆれ、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

平成26年2月16日には、旧鍋島家住宅保存修理工事落成式が挙行され、地元有志の皆さんによる郷土芸能が華やかに披露されました。4年あまりに及んだ修理工事のおかげで、念願であった旧鍋島家住宅内部の公開もできるようになり、重要伝統的建造物群保存地区の中核として地域の歴史や文化の発展に貢献できるものと考えております。

さて、今回報告いたします小路遺跡は、江戸期には家臣団の屋敷群、明治には尋常小学校や神代村役場、昭和に入り神代村立神代中学校、昭和から平成にかけては民間の織維工場が建設され、地域の産業発展の場となるなど、多くの変遷をたどってきた場所です。民間企業の撤退後は旧国見町が買い取り、現在、周囲の保存地区の景観との調和を図るため、街なみ環境整備事業により整備が行われ、その中で、織維工場の建物を取り除き、緑地公園として整備するために事前の発掘調査をしたものです。往時のまちなみの風景を多く残す神代小路地区ですが、調査の結果、当時の住宅跡や道路跡、水路の跡や、神代小路地区への入口、天神橋たもとの枡形造構の跡など、地表からわずか數センチ下には当時の様子がそのまま残されており、多くの成果が発見できました。

この調査報告書が文化財の保護保存のために多くの方に活用され、埋蔵文化財の保護に対する关心と理解をいただく資料になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元自治会の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県教育委員会学芸文化課の皆様からのご指導に衷心から感謝申し上げ、発行のことばといたします。

平成26年3月31日

雲仙市教育委員会

教育長 山野義一

例　　言

1. 本報告は平成21年度～平成24年度に実施した神代小路街みな環境整備事業に伴う、長崎県雲仙市国見町神代に所在する小路遺跡の発掘調査の報告である。
2. 調査は雲仙市教育委員会が担当した。調査は下記の期間実施した。
平成22年3月26日～平成22年3月31日
平成22年4月1日～平成23年3月31日
平成23年6月6日～平成24年3月30日
平成24年4月10日～平成25年3月28日
3. 調査体制は次のとおりである。

雲仙市教育委員会	
教育長 塩田 貞祐(～H25/2/28)	
教育長 山野 義一(H25/3/1～)	
教育次長 山野 義一(～H25/2/28)	
教育次長 岸川 孝(H25/4/1～)	
生涯学習課長 吉川 俊弘(～H23/3/31)	
生涯学習課長 村山 岩穂(～H25/3/31)	
生涯学習課長 清水 清文(H25/4/1～)	
文化財班長 田中 卓郎(～H25/3/31)	
文化財班長 柴崎 孝光(H25/4/1～)	
参考補 江崎 大太(～H25/3/31)	
参考補 辻田 直人	
主事 富永 康史	
文化財調査員 村子 晴奈	
小野 綾夏(～H22/3/31)	
大野 瑞恵(～H22/3/31)	
竹田 将仁(～H25/3/31)	
青木翔太郎(H24/4/1～)	
堀井 香七(H25/4/1～)	
文化財整理員 早稲田一美・柳原アヤ子・	
小笠 知枝(～H24/3/31)	
本田 円香(H24/4/1～)	
調査担当 辻田・村子	
4. 遺物の接合は柳原・本田が行った。遺物の実測は村子・青木・堀井が行った。遺構図版のトースは柳原・本田が行った。遺物のトースは早稲田・本田が行った。また、図版の編集・作成は村子が行った。写真は現地調査を村子が撮影した。掲載遺物写真是村子・本田が行い、三浦幸葉(臨時職員)の協力を得た。
5. 本遺跡の試掘調査・内容確認調査は平成13年度及び平成20年度・平成21年度において、行った。調査担当 辻田・小野
6. 現地での遺構の実測図作成は埋蔵文化財サポートシステム長崎支店及び株式会社扇精光に委託した。
7. 空中写真撮影業務は有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
8. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市歴史資料館 国見展示館で保管している。
9. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土地標は世界測地系による。
10. 現地調査および本書の刊行にあたり多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。
下川達彌(活水女子大学教授)、林 一馬(長崎総合化学大学教授)、宮本雅明(九州大学名誉教授)、長崎県学芸文化課、長崎県考古学会、中野祐二(長崎県波佐見町教育委員会)、雲仙市国見町神代小路自治会、有限会社 石原建設、浦川工務店、赤尾建設、水田工業、雲仙市観光物産まちづくり推進本部
11. 本書の執筆・編集は村子による。

目 次

巻頭図版

発行にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯 1 p

 第1節 発掘調査にいたる経緯

 第2節 発掘調査の方法及び経過

 第3節 遺跡の地理的・地形的・歴史的環境

第2章 検出された遺構と遺物 8 p

 第1節 南側調査区の検出された遺構と遺物

 第2節 北側調査区の検出された遺構と遺物

第3章 まとめ 79 p

 第1節 総括

 第2節 まとめ

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/20,000)	
第2図 調査区配置図 (1/2,500)	3
第3図 調査区全図 (1/700)	4
第4図 南側調査区全体図 (1/400)	5
第5図 北側調査区全体図 (1/300)	6
第6図 南側調査区遺構配置図 (1/230)	9～10
第7図 南側調査区西側水路護岸石垣 (SD-1) 平面図・立面図 (1/120)	11～12
第8図 1区段階状遺構検出状況 (1/60)	13
第9図 1区段階状遺構出土遺物 (瓦質土器・磁器) (1/3)	14
第10図 3区土坑群 (SK-1～SK 7) 検出状況 (1/40)	15
第11図 3区土坑 (SK-1・2) 出土遺物 (土師器・磁器) (1/3)	17
第12図 3区土坑 (SK-3・4・5) 出土遺物 (土師器・磁器・陶器) (1/3)	19
第13図 3区土坑 (SK-6) 出土遺物 (土師器・土師質土器・磁器) (1/3・1/6)	21
第14図 3区土坑 (SK-6) 出土遺物 (磁器) (1/3)	22
第15図 3区土坑 (SK-6) 出土遺物 (磁器・陶器) (1/3)	23
第16図 3区土坑 (SK-7) 出土遺物 (土師質土器) (1/3)	25
第17図 3区土坑 (SK-7) 出土遺物 (瓦質土器・磁器) (1/3)	27
第18図 3区土坑 (SK-7) 出土遺物 (磁器) (1/3)	29
第19図 3区土坑 (SK-7) 出土遺物 (磁器) (1/3)	30
第20図 3区土坑 (SK-7) 出土遺物 (陶器) (1/3)	33
第21図 3区埋甕・石列検出状況 (1/40)	34
第22図 3区埋甕検出状況 (1/20)	34
第23図 3区埋甕内出土遺物 (土師器・銅製品)・埋甕 (1/3)	35
第24図 5区～8区道路・橋 (昭和21年頃に架けられたもの) 検出状況 (1/80)	36
第25図 南側調査区東側水路護岸石垣 (SD-1・SD-2) 平面図・立面図 (1/120)	37～38
第26図 6、7区水路 (SD-1) 木箱検出状況 (1/80)	40
第27図 6、7区水路 (SD-1) 出土木製品 (木箱) (1/6)	41
第28図 7、10区方形状石列遺構 (1/40)	42
第29図 南側調査区土層図 (1/80)・配置図 (1/800)	43
第30図 SD-2Ⅲ層、IV C層出土遺物 (土師質土器・磁器・陶器) (1/3)	45
第31図 SD-1 V層出土遺物 (磁器) (1/3)	46
第32図 SD-1 IV層出土遺物 (瓦質土器・炻器・磁器) (1/3)	47
第33図 SD-1 IV層出土遺物 (磁器・陶器) (1/3)	49
第34図 SD-1 IV層出土遺物 (木製品) (1/3)	50
第35図 SD-1 III層出土遺物 (磁器) (1/3)	51
第36図 SD-1 III層出土遺物 (磁器) (1/3)	53
第37図 SD-1 III層出土遺物 (磁器) (1/3)	54
第38図 SD-1 III層出土遺物 (陶器) (1/3)	57

第39図	SD-1 III層出土遺物（木製品）(1/3・1/6)	58
第40図	SD-1 III層出土遺物（ガラス製品）(1/3)	59
第41図	SD-1 出土遺物（土師器・磁器）(1/3)	60
第42図	IV層・III層出土遺物（土師器・磁器）(1/3)	61
第43図	III層出土遺物（磁器）(1/3)	63
第44図	III層出土遺物（磁器）(1/3)	64
第45図	III層出土遺物（土師器・磁器・ガラス製品）(1/3)	67
第46図	19区～24区江戸期建物基礎・神代村役場建物基礎検出状況・土層図(1/100)	68
第47図	22区拱形造構検出状況(1/60)・土層図(1/60)・配置図(1/1,000)	70
第48図	19区～24区IV層出土遺物（土師器・磁器・陶器）(1/3)	72
第49図	22区拱形造構出土遺物（土質質土器・瓦質土器・磁器・陶器）(1/3)	73
第50図	北側調査区神代川旧南側護岸石垣検出状況(1/130)・神代村中学校基礎検出状況(1/300)	74
第51図	北側調査区土層図(1/120)・配置図(1/600)	76
第52図	北側調査区出土遺物（土師器・磁器・陶器・ガラス製品・プラスチック製品）(1/3)	78

表 目 次

第1表 出土遺物計測表 82～96

図 版 目 次

中表紙図版(カラー) 神代小路重要伝統的建造物群保存地区(平成新山を望む)

巻頭図版①(カラー) 遺跡上空写真(平成23年)

巻頭図版②(カラー) 遺跡上空写真(南側調査区 水路)

遺跡上空写真(南側調査区 屋敷基礎・拱形造構)

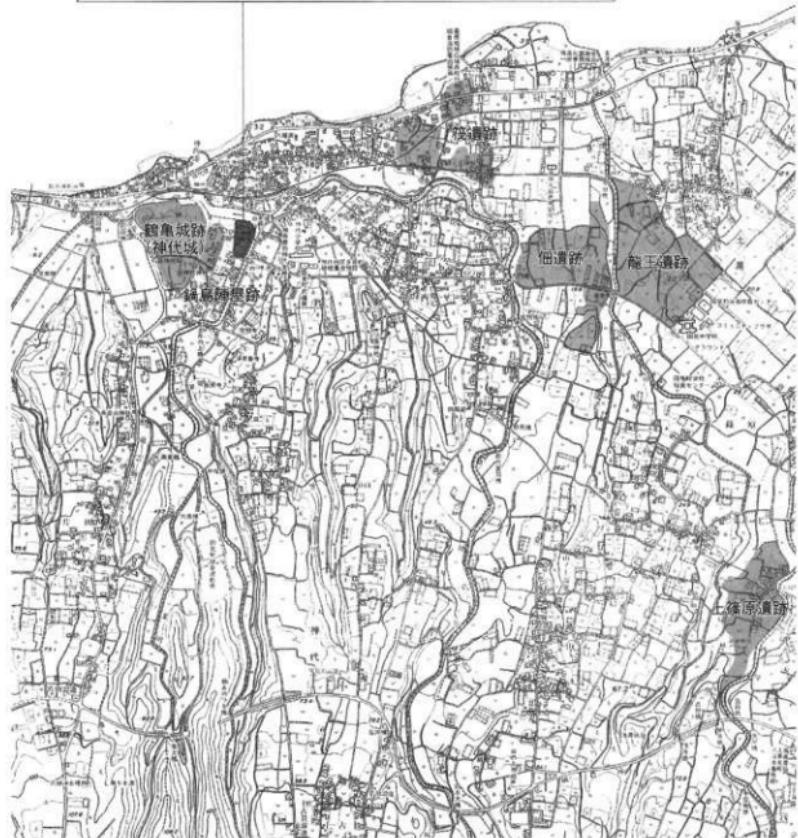
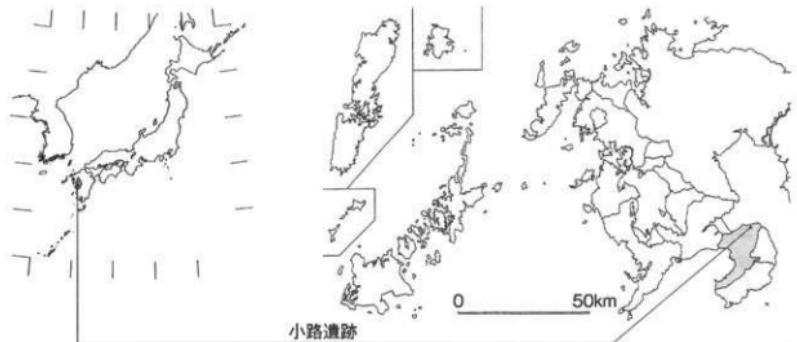
巻頭図版③(カラー) 遺跡上空写真(北側調査区 神代村中学校校舎基礎)(上)

遺跡上空写真(神代村中学校校舎基礎)(左下)

遺跡上空写真(神代川旧南側護岸石垣)(右下)

- 図版1
遺跡周辺地域上空写真（昭和36年・1961国土地理院）
- 図版2
遺跡上空写真（昭和22年・1947頃米軍撮影）
- 図版3
遺跡上空写真（昭和36年・1961国土地理院）
- 図版4
遺跡上空写真
- 図版5
南側調査区上空写真（1区～24区）
1区水路（SD-1）（東から）
1区水路（SD-1）北側護岸石垣
- 図版6
3区水路（SD-1）内敷石・飛び石
1区・3区水路（SD-1）内敷石検出
1区水路（SD-1）土層（東から）
1区土坑（SX-1）
1区土坑（SX-2）
1区階段状遺構（東から）
1区階段状遺構土層（西から）
3区土坑（SK-1～SK7）
- 図版7
3区土坑（SK-1）
3区土坑（SK-2）
3区土坑（SK-3）
3区土坑（SK-4）
3区土坑（SK-5）
3区土坑（SK-6）
3区土坑（SK-7）
3区石列・埋甕検出
- 図版8
3区埋甕検出状況
- 3区埋甕内遺物出土状況
5区道路検出状況（南から）
南側調査区東側水路（SD-1）（西から）
7区昭和21年に架けられた橋の基礎
8区烟の石垣（東から）
3区水路（SD-1）北側護岸石垣下の梯子胴木
7区水路（SD-1）内木箱出土
- 図版9
7区水路（SD-1）内鍋鳥焼出土
7区水路（SD-1）南側護岸石垣
15区水路（SD-1）北側護岸石垣
9区水路（SD-1・2）北側護岸石垣
9区水路（SD-2）土層（東から）
7区・10区方形石列遺構（東から）
15区水路（SD-1）浸水状況（2011.09.01大潮時）
現地説明会（2011.03.13）
- 図版10
16区～24区遺構検出（南から）
屋敷建物基礎検出（南から）
屋敷建物基礎検出（西から）
屋敷建物基礎遺構（SX-6）
屋敷建物基礎遺構（SX-9）
屋敷建物基礎遺構（SX-10）
屋敷建物基礎遺構（SX-16）・神代村役場基礎
屋敷建物範囲内出土土師皿
- 図版11
22区桥形石列検出
22区桥形石列①
22区桥形石列②
土坑（SX-19）
神代村役場トイレ遺構
神代村役場建物基礎（三角コーン配置部分）
川東公民館（昭和32年神代村役場建物を移築）
屋敷建物基礎検出作業風景

図版12 北側調査区上空写真（25～36区、後ろは現雲仙市立神代小学校）	出土遺物写真 (第17図・第18図・第19図・第20図)
神代川旧南側護岸石垣（北から） 29区・30区神代川旧南側護岸石垣	図版19 出土遺物写真 (第20図・第23図)
第13図 29区神代川旧南側護岸石垣	図版20 出土遺物写真 (第27図・第30図・第31図・第32図)
29区神代川旧南側護岸石垣土層 28区神代川旧南側護岸石垣	図版21 出土遺物写真 (第32図・第33図)
27区・28区集石検出 29区・30区神代村中学校建設以前の造成土層 29区神代村中学校建設以前の造成石列 34区石列検出（東から） 神代村中学校校舎栗石地業・集石検出	図版22 出土遺物写真 (第34図・第35図・第36図)
図版14 31区～36区神代村中学校校舎基礎・栗石地業 34区神代村中学校校舎基礎 30区神代村中学校トイレ構造・栗石地業 25区～28区神代村中学校校舎栗石地業 28区神代村中学校校舎側溝・栗石地業 27区石列検出 神代村中学校校舎基礎検出作業風景 神代川旧南側護岸検出作業風景	図版23 出土遺物写真 (第36図・第37図・第38図)
図版15 出土遺物写真 (第9図・第11図・第12図)	図版24 出土遺物写真 (第38図・第39図・第40図・第41図・第42図)
図版16 出土遺物写真 (第12図・第13図・第14図)	図版25 出土遺物写真 (第42図・第43図・第44図・第45図)
図版17 出土遺物写真 (第15図・第16図・第17図)	図版26 出土遺物写真 (第45図・第48図・第49図)
	図版27 出土遺物写真 (第49図・第52図)



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯（第1図・第2図・図版2・図版3）

小路遺跡は、長崎県雲仙市国見町神代小路地区に所在する。「神代小路」地区は近世から続く武家町で、今も当時の様子をとどめている情緒のあるまちなみである。「神代小路」地区は、平成17年に「重要伝統的建造物群保存地区」として国からの選定を受けている。

神代小路街なみ環境整備事業に伴い、緑地整備工事が行われることとなり、埋蔵文化財の存在が予想されたため、平成13年度、平成20年度、平成21年度に試掘調査を行った。その結果、嘉永5年(1852)の絵図に記載のある、水路跡などが良好な状態で検出された。また、神代村中学校校舎のコンクリート基礎に伴う栗石地業なども検出された。神代村中学校校舎は航空写真（図版3）で確認できる。

緑地整備工事は、水路跡や神代村中学校校舎基礎の範囲にまで及ぶため、教育委員会と工事施工担当部局である観光物産まちづくり推進本部の間で協議を重ね、施工範囲については発掘調査を行うこととなった。試掘調査の成果が良好なため、前述の絵図や航空写真に記載のある水路や建物、枡形や神代川旧南側護岸石垣などの遺構を確認するため発掘調査を行った。

調査は、平成21年度～22年度に南側調査区（1区～11区）、平成23年度に南側調査区（13区～24区）と北側調査区（25区～27区）、平成24年度に北側調査区（29区～36区）を行った。今報告では、平成13年度、平成20年度、平成21年度に行った試掘調査及び平成21年度～平成24年度に行った本調査について報告する。

第2節 発掘調査の方法及び経過（第1図・第2図・第3図・第4図・図版2・図版3）

これまでの試掘調査では、江戸期から昭和23年頃までの水路跡や神代村中学校校舎基礎が検出された。水路跡は、嘉永5年(1852)の絵図や明治5年(1872)の字図に記載され、昭和22年に米軍によって撮影された航空写真（図版2）でも確認することができる。神代村中学校校舎は、昭和36年に国土地理院によって撮影された航空写真（図版3）で確認できる。

今回の調査では、これまでの試掘調査も踏まえたうえで、嘉永5年(1852)の絵図に描かれている水路の検出や、建物跡、神代川旧南側護岸石垣などを確認するため、緑地整備工事の対象地である雲仙市歴史資料館国見展示館の南側と北側の2地点を調査した。調査は、世界測地系を使用し、調査対象地を、4mメッシュに区切り、グリッド法によって行った。雲仙市歴史資料館南側を1区～24区の24分割、北側を25区～36区の12分割し、調査を行った。表土は重機で掘削し、その後の掘削については全て人力により行った。写真は、調査区全景の航空写真、各遺構の検出状況、土層の堆積状況などを撮影した。遺構の実測は1/20を基本とし、各遺構については個別図として1/10での実測も行った。遺物については、遺物包含層は一括で取り上げ、土坑や埋甕、建物基礎などの遺構に関わるものについては可能な限り実測して取り上げた。

今回の調査では、江戸時代から昭和初期までの遺構や遺物が検出されており、その当時の「神代小路」地区のまちなみの様子を彷彿する成果となった。

【参考文献】

国見町教育委員会 2003 「神代小路」国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告書 長崎県国見町教育委員会（現 雲仙市教育委員会）

辻田直人・村子晴奈 2010 『鶴亀城（神代城）跡』 雲仙市文化財調査報告書 第9集 長崎県雲仙市教育委員会

辻田直人・竹田将仁 2012 『鍋島陣屋跡』 雲仙市文化財調査報告書 第10集 長崎県雲仙市教育委員会

第3節 遺跡の地理的・地形的・歴史的環境（第1図・第2図）

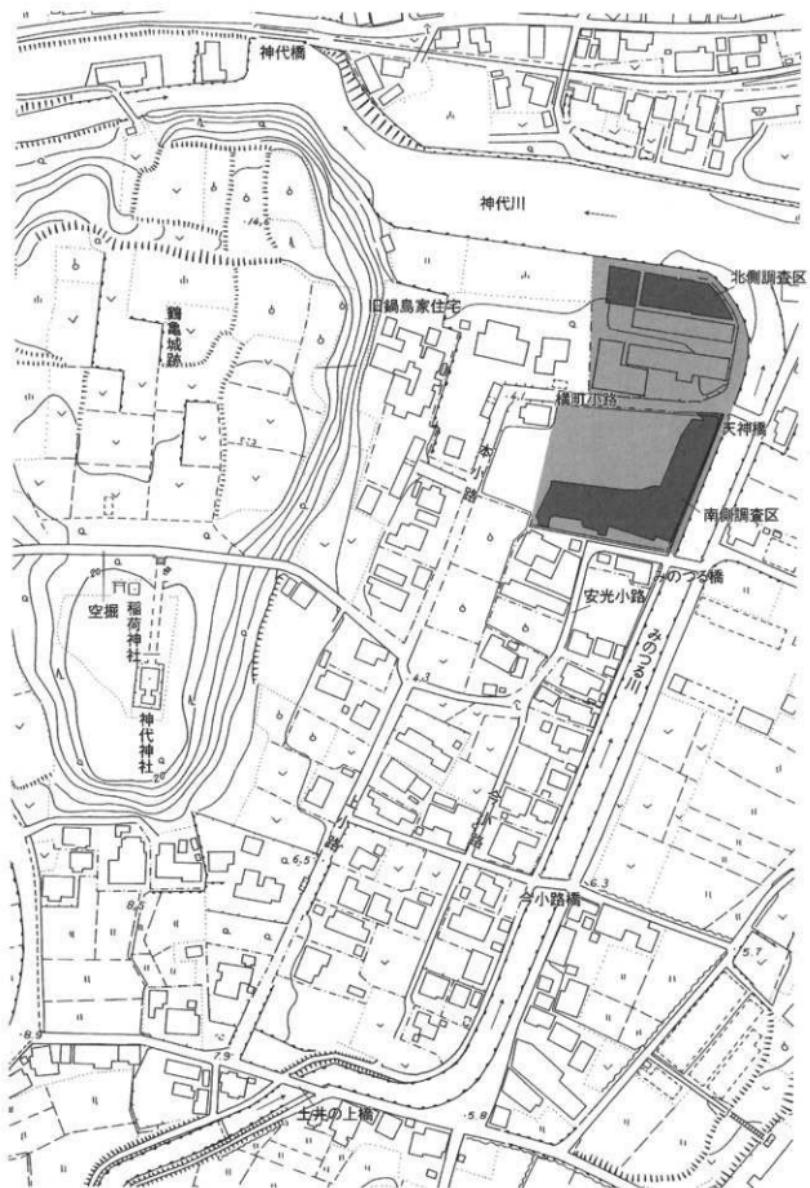
小路遺跡は、島原半島の最北端、雲仙市国見町「神代小路」地区に位置する。中世の城郭跡である鶴亀城（神代城）跡の東側に位置し、遺跡の北側には有明海と神代川が、東にはみのつる川が流れる。「神代小路」地区は、佐賀鍋島藩を本藩とする神代鍋島藩主の居住地である鍋島邸と、その臣下を集めて形成された武家町である。東西150m、南北350mの長方形を呈するまちなみで、鶴亀城（神代城）跡に面する以外の三方は、みのつる川や神代川に囲まれ、街路は南北に通る本小路と上小路がメインストリートとなり、その他に横町小路・安光小路・今小路で形成されている。武家町「神代小路」地区は、平成17年に「重要伝統的建造物群保存地区」として国からの選定を受けており、小路遺跡はその「神代小路」地区内に所在する。

「神代小路」地区西側にそびえる鶴亀城（神代城）跡は、中世の在地豪族「神代氏」（神代貴益）の居城として歴史の舞台に登場する。有明海に面した独立台地上に位置し、周囲の平地部分との比高差は8m～15mを測る。島原半島は雲仙普賢岳を主峰とし、円錐状を呈する。その裾野部分には、古期雲仙火山の活動により舌状に伸びた丘陵が何本も存在し、あたかも手のひらの指を開いたように海岸付近まで伸びる（第1図）。鶴亀城はその丘陵の先端部がみのつる川によって寸断され、独立した島状の台地となったものである。周囲との比高差もあいまって難攻不落の海城と伝えられている。

神代氏は、戦国時代末期の1577年、龍造寺隆信が島原半島に進出するとともにその配下に加わる。1584年の沖田畠の戦いで島津・有馬と戦うが、龍造寺の敗走とともに、神代氏末代の貴茂も敗走し、鶴亀城（神代城）に籠城するも暗殺され神代氏は滅亡することとなる。1587年には豊臣秀吉の九州平定により、神代・伊古（現雲仙市瑞穂町）・古部（現雲仙市瑞穂町）が佐賀領に編入されることとなり、初めて佐賀領としての神代小路が誕生する。当時の佐賀藩は、龍造寺・鍋島の二頭両立体制であったが、1607年に龍造寺政家と龍造寺隆信の孫である藤太郎高房が死去したことにより、鍋島直茂の子である勝茂を当主とする鍋島佐賀藩が成立する。その翌年、神代小路は勝茂の父親の兄にあたる鍋島信房の所領となり、神代鍋島領が誕生することになる。初代信房から三代までは神代小路に居を構えず、1663年4代嵩就から神代小路に入り、17世紀後半には武家町が造成されたと伝えられている。4代嵩就は、治世に優れ神代小路の武家町を整備し領内の農・林業の発展に貢献し多くの領民に親しまれたといふ。

神代鍋島領は、明治2年の版籍奉還まで続いたが、それ以降は、宅地開発や神代小学校・中学校、道路建設やみのつる川の改修等が行われた。特に横町小路付近は、まちなみの変化が著しく、明治初期には神代小学校（尋常小学校）や神代村役場が、昭和23年には神代村中学校が建てられ、神代村の中でも中心的な役割を担っていた地域であったようである。また、昭和42年には、神代村中学校のグラウンド跡に国見織機（株）の工場などが建てられ、平成7年まで操業を続けたが、その後撤退した。その土地を平成12年に国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が買収し、現在は、神代村中学校の校舎の改修を行い、雲仙市歴史資料館国見展示館として活用している。

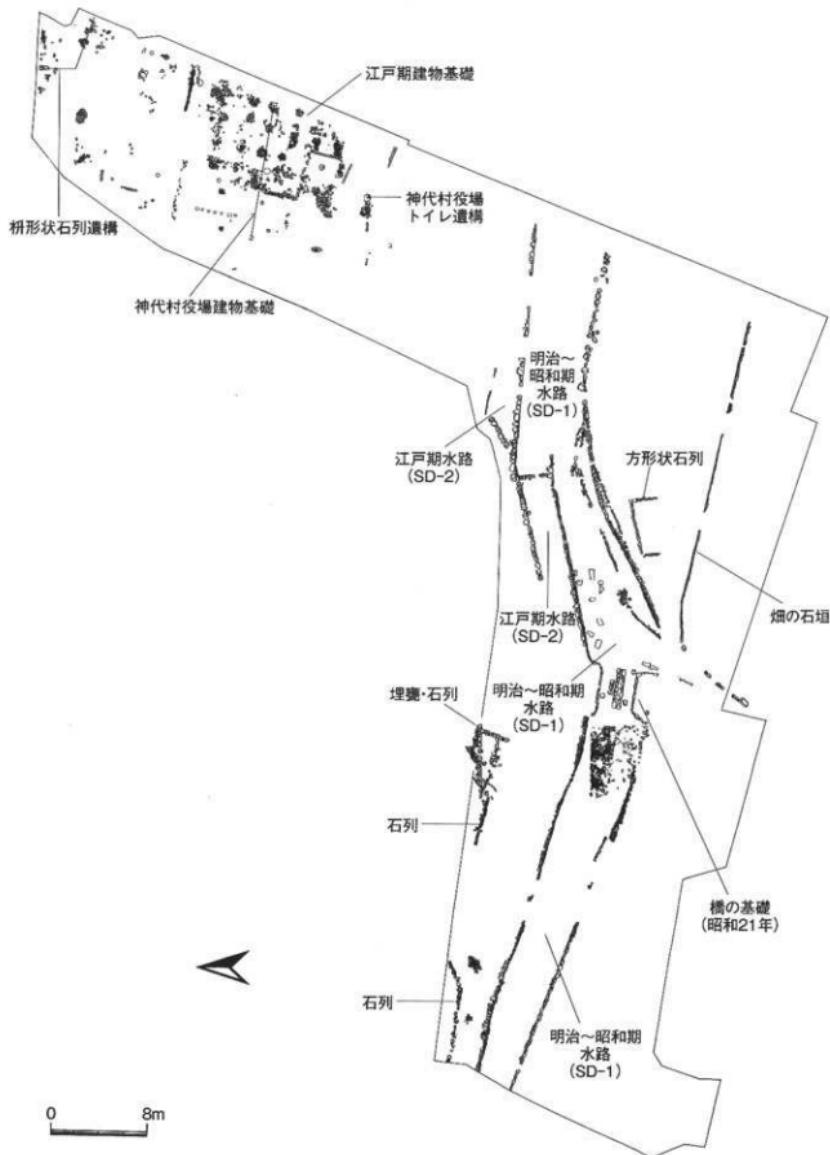
遺跡の西側に位置する鶴亀城（神代城）跡は東西に走る大きな空堀（第2図）で分断され、北側が二の丸、南側の1段標高が高い方が本丸とされている。地元小路地区の故帆足清勝氏は、詳細な城跡の縄張り図を作成し、構築年代や城名の出来、その他、鶴亀城（神代城）跡に関わる周囲の地形や歴史、関連の城郭跡などの研究（帆足清勝資料）を行っている。また、近年、鶴亀城（神代城）跡を踏査した木島孝之氏は本丸部分の縄張り図を作成し、巨大な枱形虎口や周囲の土壘の存在を明らかにしている。また、木島氏は報告（木島2003）の中で、鶴亀城（神代城）跡（木島氏は神代城と呼ぶ）の枱形虎口や土壘は、神代鍋島氏による大規模改修と考えられ、織豊系縄張り技術により在地系城郭を



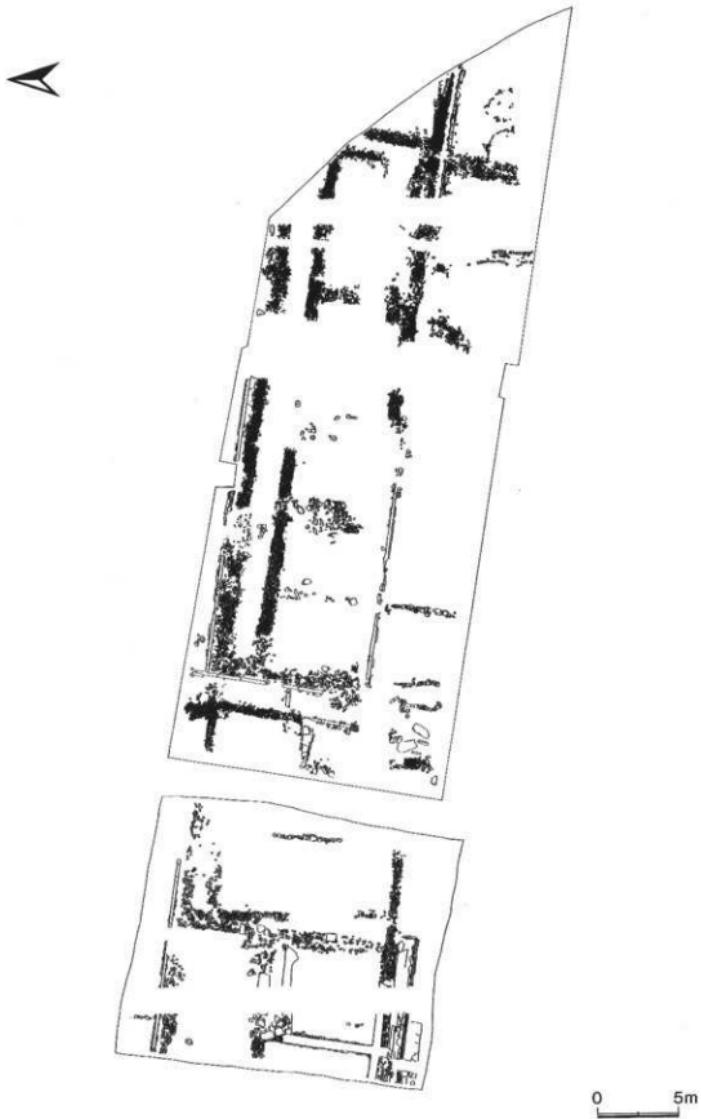
第2図 調査区配置図 (1/2,500)



第3図 調査区全図 (1/700)



第4図 南側調査区全体図 (1/400)



第5図 北側調査区全体図 (1/300)

ベースに改修された“織豊系もどきの城郭”と位置づけている。また、長崎県教育委員会の調査では、二の丸についても土塁や船着場等が残存しており、神代鍋島家による城の改修が全体的に及んでいることが判明している。

小路遺跡が存在する「神代小路」地区は、前述したが第4代鍋島嵩就の時代に築かれたとされ、また、鍋島陣屋の年代についても、最も古い長屋門が元禄時代と想定されてきた。しかしながら、平成24年度に報告した鍋島陣屋跡（2012辻田・竹田）や保存修理工事に伴う解体作業や、鍋島家の日記などにより、長屋門は幕末期文久2年（1862）に建てられ、御北と呼ばれる茅葺屋根の建物が万延元年（1860）に建てられたものと判明している。また、平成22年度に報告した鶴亀城（神代城）跡（2010辻田・村子）においては、18世紀以降の建物基礎遺構や土坑などが武家町「神代小路」地区の中央で検出されている。同様に、長屋門東側で検出された水路跡と廃棄土坑から、18世紀後半以降の陶磁器が大量に検出され、平成24年度の鍋島陣屋跡（2012辻田・竹田）の調査でも、18世紀代の大規模な造成工事の痕跡が検出された。鍋島陣屋跡を含む「神代小路」地区の発掘調査では、河川堆積層から弥生時代～古墳時代の遺物が出土することから、鍋島陣屋跡付近は、少なくとも弥生時代～古墳時代には河川（みのつる川）跡であったことや、中世神代氏時代の堀跡は、河川（みのつる川）跡を利用したものであったことが判明した。また、武家町「神代小路」地区は、神代鍋島家による埋立造成によって作られたとされてきたが、地区内の大部分はみのつる川の河川堆積による中州状の土地で、神代鍋島家による埋立造成は、鶴亀城（神代城）跡の堀部分や、武家町周囲の護岸部分と想定されるなど、鍋島陣屋跡や武家町神代小路の成り立ちについて、多くの事柄が判明している。また、本書で後述するが、今回の調査の成果でも、18世紀後半以降から昭和初期にかけての遺構や陶磁器類などが多く出土しており、嵩就の治世の時代の遺物や遺構は確認されていない。これらのことから、第4代嵩就時代（1701年没）の「神代小路」地区のまちなみや鍋島陣屋の様子は、今と大きく異なっていたと予想される。

前述のとおり、嵩就は治世に優れ、いまでも法名にちなんで「一雲さん」（一雲了得）と親しまれている。嵩就是、村の発展に大きく貢献し、神代鍋島藩の基礎を築いたものと考えられることから、まちなみや鍋島陣屋についても嵩就の時代のものと言い伝えられてきたのではないだろうか。その後、18世紀代になり、武家町「神代小路」地区のまちなみが形成されていったと考えられる。

【参考文献】

- 本島孝之 2003 「第2章 神代城と神代「小路」」 2003国見町教育委員会『神代小路』国見町伝統的建造物群保存対策 調査報告 長崎県国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）
国見町 1984『国見町郷土史』国見町
国見町教育委員会 2003『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告 長崎県国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）
神代を史ろう会 2009『神代鍋島家年譜』
辻田直人・村子晴奈 2010『鶴亀城（神代城）跡』雲仙市文化財調査報告書 第9集 長崎県雲仙市教育委員会
辻田直人・竹田将仁 2012『鍋島陣屋跡』雲仙市文化財調査報告書 第10集 長崎県雲仙市教育委員会
宮本雅明 2003「第3章 神代小路の空間と景観」2003国見町教育委員会『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告 長崎県国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 南側調査区（1区～24区）の検出された遺構と遺物（第6図～第49図）

これまでの試掘調査では、江戸期～昭和23年頃までの水路跡や、江戸期の土坑などが検出された。その成果をもとに今回の調査を行った結果、江戸期～昭和23年頃までの水路跡や、江戸期の土坑群、埋甕、江戸期の建物基礎、枠形遺構、方形状石列遺構、明治初期から昭和32年頃まで存在した神代村役場建物基礎、水路を横断する為に昭和21年頃に掛けられた橋の基礎や橋に伴う道路跡、及び、畑の石垣などが検出された。

一水路（SD-1）護岸石垣—（第6図・第7図）

これまでの試掘調査では、水路（SD-1）護岸石垣の一部が検出されていたが、今回完掘を目指した。今回の調査では、南側調査区を東西に横断するように明治期～昭和初期の水路跡（SD-1）（第6図）が検出された。水路（SD-1）の護岸は石垣で形成され、その全長は約70mにも及ぶ。水路（SD-1）の北側と南側に護岸石垣が構築され、水路を形成する。石垣には、拳大から幅50cmほどの自然石を用いており（みのつる川と交わる部分には切石を用いている）、最大5段の野面積みである。根石には比較的大きな石を用いている。護岸石垣の基底レベルはほぼ同じであり（第7図）、根石の接地面は、河川堆積層を掘り込み、構築したものである。また、石垣の基礎には、部分的に梯子胴木（松材）（図版8）を使用している。松材は、水中に沈めておくとほとんど腐敗せず長持ちすることから、地盤が弱く、石垣が沈下しやすい部分にのみ使用されたと考えられる。

北側護岸石垣と南側護岸石垣の根石の基底レベルはほぼ同じであるが、石垣最上部の石のレベルは南側護岸石垣の方が1段分ほど低い。北側護岸石垣には拳大の裏込め石が確認されたが、南側護岸石垣は自然堆積層を掘り込み石垣を構築しており、裏込め石は確認されていないことなどから、北側護岸石垣と南側護岸石垣の構築に違いが見える。水路（SD-1）北側には、明治から昭和初期にかけて神代村役場や尋常小学校などの建物が存在したため、大雨などの災害時に水路が決壊しないように北側護岸石垣を頑丈に構築されたのではないだろうか。

水路（SD-1）護岸石垣は一部根石のみ残存している部分や、國見織維工場（株）のコンクリート基礎などで抜き取られている部分も存在するが、概ね良好な状態で残存していることが判明した。水路跡（SD-1）の西側は調査区外にまで延びており、全容を把握することはできなかったが、航空写真（昭和22年米軍撮影）（図版2）には今回の調査区よりもやや西側に延びていることが確認できる。

水路（SD-1）内からは、土師器や陶磁器、木製品、ガラス製品などが大量に検出された。水路（SD-1）北側護岸の石垣は、覆土で覆われており、石垣最上部の石の頭部部分がかろうじて確認できる状態であった。戦前から小路地区に居住する古の話によれば、「子供の頃はこの地は湿地帯で小さな川があったが、石垣は見たことない」とのことであり、戦前には土壙の堆積が進み、石垣が隠れてしまうほどになっていたようである。また、北側護岸石垣の前面には水路の底に拳大の礫が敷き詰められており、敷石よりも上位は江戸期の遺物も見られるものの、そのほとんどは昭和初期前後にかけてのものである。これらのことから、少なくとも明治期には水路（SD-1）が造られたと考えられる。

今回検出された水路は、最終的には昭和22年に創立された神代村中学校の運動場造成時（昭和24年）に埋没してしまっており、調査区内の土層には、その当時の層（第29図第II層）がはっきりと確認できる。